

「油化学会だからこそできる未来への貢献」



熱弁を振る岡野会長

講師： 岡野 知道氏（日本油化学会 会長）

日時： 令和 6 年 2 月 13 日 午後 3 時から 5 時

場所： 油脂工業会館 9 F 大会議室で対面開催と Zoom による同時配信

春を思わせるような暖かい日であった。参加者 17 名（会場参加者 9 名、Zoom 参加者 8 名）で、定刻の午後 3 時より滝澤代表による挨拶と講師の紹介からセミナーは開催された。

岡野氏はまず日本油化学会の現状を説明された。他の学会と比べて油化学会は企業および企業研究者の構成比率が会員数、財務構成の両面で高い。昨今、油化学会の個人会員が減っているにも関わらず財務が比較的安定しているのは、法人会員の数があまり変わらず収入の 7 割を支えているからである。個人会員が減るのは人口減少で仕方がないことで、多くの学会でも起こっている。会員の減少で財務的に行き詰っている他の学会と同様のことが油化学会で起こらせないためには法人会員と良い関係を継続させることが大切であり、今からその準備が必要であると述べられた。

日本油化学会の特徴の一つは、油脂と界面科学を基軸に発展してきた学術領域としての裾野の広さと基礎技術から応用技術まで同じプラットフォーム上に存在する実現量の高さで、重要な武器である。事業環境変化が激しいこれからの社会において、企業にとっての学会の有益性も大きく変化する。したがって投資価値が高い学会という形を模索してみる必要がある。油化学が法人会員に対していかに貢献できるか、また、これからの油化学会をさらに発展させる「未来に向き合う」ためのビジョンを述べられた。

油化学会の大きな強みは多様な学術領域において、アカデミアから企業まで多彩な人たちが基礎から応用まで幅広くオープンに交流する点にある。さらに油化学会は世界レベルで重要度が高まっている課題「サステナビリティ」と「ウェルビーイング」という未来課題と親和性が高い領域を担っている。この利点をより伸ばすことで法人会員をつなぎとめ、さらに増やしていける。

「サステナビリティ」という未来課題と油学会との親和性について油学会の主要学問領域である界面科学の中の界面活性剤の発達の歴史を例に説明された。魚油や牛脂を資源とした石ケンから始まり、界面活性剤の開発は時代に合わせた資源活用の歴史であり、油化学は社会的に有用なケミカルを産学が一体となってどこよりも早くサステナビリティに向き合ってきた。さらに油化学会が「これから目指すべき未来像」の例としてバイオモノづくりの可能性や高い CO₂ 固定、残渣がなく完全に利用する資源などの要件を満たす技術開発などがこれからの課題となると述べられた。

ウェルビーイングも油化学会の得意分野と密接に関係する。ニュートリションや天然油脂の分析技術、レドックスコントロールなどは親和性が高い重要技術である。食品の機能性（食分野）と医薬品（医療分野）間の境が現在あまりはっきりしなくなっているがこれから油化学がどの様に取り組んでいけばよいか。医療や創薬の技術改革も重要な未来技術である。長寿社会における健康への向き合い方として「知る」こと、すなわち、「検査技術の開発」や「防ぐ」ことすなわち、「予防技術の開発」の重要性はますます高まる。すなわち、疾病は「治す」という考えより、疾病にならないようにする「予防」の方が重要である。

油化学会のこれからの在り方として「国際化や学際化の加速を目指した学会間連帯の強化」、「技術と人の両面におけるアカデミアと企業のマッチング」、「セミナーや交流イベントによる人材の育成」、「国などの支援獲得による研究活動の活性化」が必要と述べられた。

とりわけ、昨今の日本の研究環境について深く言及された。研究人材（特に博士）の就職や処遇に関する課題、すなわち日本のこれからを支えていく若手研究者が不安定なポジションで腰を落ち着けた研究ができない状況にある。少ない研究費、大きな雑務を抱え、研究に没頭できない。国からの研究助成は競争領域へ集中しており、投資回収視点に基づいた出口管理強化に伴い、未知の可能性を包含した自由な研究は棄損され、スパンの長い基礎研究は敬遠される傾向にある。また企業の研究は事業活動なのでリターンとスピードは強く意識されるべきであるが、学術研究まで一つの価値観や手法で束縛することは本来の学問の姿ではない。将来の日本のことを考えると若手研究者に対して単なる賞ではなく 3～5年のスパンで研究費を支援できるようなことをしたい。あまり知られていない国の予算を活用し、さらに国を始めとして民間企業の協力を得て支援組織の設立に努力したいと述べられた。ご講演は約 1 時間で熱く語られた。

素晴らしいご講演のあとの質疑応答が、会場およびリモートで活発になされた。油化学会に対する要望も数多くあり、非常に有益な議論がなされ、質疑応答もまた 1 時間という盛り上がりようであった。コロナ禍で数年間開かれなかった懇親会も開催され、会場出席者全員が参加し、ここでも活発な意見交換が行われた。



会場と Zoom 参加者からたくさんの質問を頂き 講演時間を上回って行われた質疑応答の様子